奈良市農村集落・農家悉皆調査

建造物研究室

昭和58年度から2カ年計画で奈良市内の全農村，農家を概観する調査を始めた。農家については伝統的様式になるもの全戸につき形式分布と変遷をつかみ，価格についての格付けをし，とくに優れたものを市の文化財として保護する基礎資料を作ることが目的である。1日当り何十棟も見るので一戸当りは10分程度，時には外からの観察だけになってしまったが，58年度には約90の集落を廻り800余棟を調査した。

奈良市は東の山間部，平野部，西の丘陵地帯にわたり東西に長く，奈良町周辺と町の四方へ延びる街道を含む農村の立地条件は変化に富んでいる。また民家の先進地帯である近畿の中央から外郭にかかる位置にあり，地域的に重要，かつ興味の持たれるところである。

調査はまだ6割程度済んだに過ぎないが，中間報告として以下のような点を指摘できる。

(1) 集落には種々の型があるが，大別すると，街村的なもの，集落の輪郭が画然として密度高く閉鎖的なもの(主として平野部)，密度低く集落内外の境界がはっきりしないもの(山間部)がある。屋敷構も，多くの付属屋で囲まれた閉鎖的でコンパクトな型は平野部に多い。

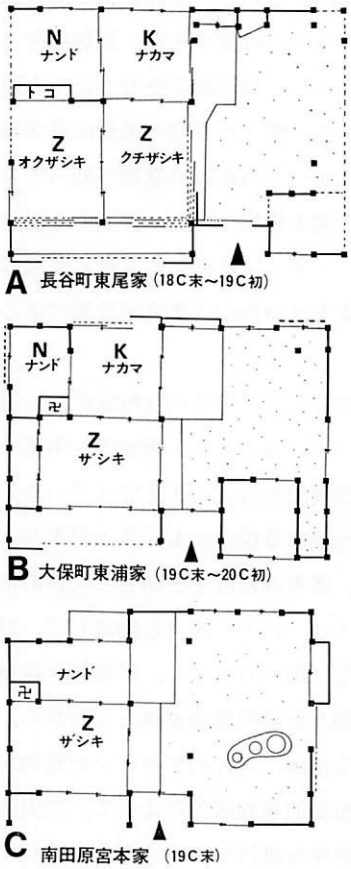
(2) 農家主屋の年代は古いものが少なく，18世紀後半が上限とみられる。明治期のものが圧倒的に多く下限は戦後に及ぶ。

(3) 屋根は草葺，入母屋または寄棟(入母屋が多い)から大和棟へ変るが，中間段階で切妻も小数ある。上手の座敷を落棟の瓦葺にする例は新しい家に多い。また，つし二階付の切妻造瓦屋(釜屋は大和棟同様落棟)は明治に現われる。一方，昭和になっても入母屋造草葺が作られるなど，一つの時代に複数の形式が併存する。これは屋根以外の平面，構造についても同様である。

(4) 平面は近畿一円に分布する四間取(細部は異なる)のほか，三間取・二間取が2～3割あり，幕末においては四間取よりも二間取・三間取の方が一般的ではなかったかと想像される。二間取の上手に2室増築して四間取とした家もあり，二間取→四間取への発展がうかがわれる。

(5) 大和棟の出現は他地域より遅く，古風な突止溝が19世紀後半に見られるなど保守性が強い。

(吉田　靖)



四間・三間・二間取の例